



Title	「比較表現の比較・検討」の授業と改訂プラン - 高校生1日体験入学における授業実践 -
Author(s)	武田, 圭右; 佐藤, 裕太; 豊澤, 淳子; 水野, 泰希; 森蔭, 祐; 若山, 薫里; 伊藤, 由香; 奥山, 友貴; 林, 大輔; 結城, 拓
Citation	教授学の探究, 24, 93-114
Issue Date	2007-02-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/18889">http://hdl.handle.net/2115/18889</a>
Type	bulletin (article)
File Information	kyouju24-93.pdf



[Instructions for use](#)

# 「比較表現の比較・検討」の授業と改訂プラン

— 高校生 1 日体験入学における授業実践 —

武田 圭右 (3 年), 佐藤 裕太 (3 年), 豊澤 淳子 (3 年)  
水野 泰希 (3 年), 森蔭 祐 (3 年), 若山 薫里 (3 年)  
伊藤 由香 (4 年), 奥山 友貴 (4 年), 林 大輔 (4 年)  
結城 拓 (4 年)

(北海道大学教育学部教育方法学研究室)

## 目 次

0. はじめに
1. 「比較表現の比較・検討」における教育内容構成
  1. 1. 目標の設定
  1. 2. 授業プランの特徴
    1. 2. 1. 状況・文脈に即した比較表現の使い分け
    1. 2. 2. 直線を用いた図式の活用
    1. 2. 3. 取り扱う形容詞の限定
  1. 3. 授業プランにおける教育内容の論理構造
    1. 3. 1. 形容詞の相対的用法と絶対的用法
    1. 3. 2. “比較級 than” の「差の明示」と “as 原級 as” の意味
    1. 3. 3. “比較級 than” と “not as 原級 as” の使い分け
    1. 3. 4. “not 比較級 than” と “not as 原級 as” の使い分け
    1. 3. 5. “no 比較級 than” と “less 形容詞 than” の意味
2. 「比較表現の比較・検討」による授業実践と改訂
  2. 1. 「比較表現の比較・検討」の授業プラン
  2. 2. 授業実践記録
  2. 3. 「比較表現の比較・検討」の改訂案

## 0. はじめに

北海道大学教育学部では、毎年 6 月に、高校生を対象とした 1 日体験入学を実施している。この体験入学の場で、教育方法学研究室に所属する 3, 4 年生は、参加した高校生たちにたいして、60 分の授業を実践している。以上の取り組みの目的は、授業の実践を通して高校生たちに、教育方法学研究グループが行っている研究の一端を知ってもらうことである。ただ授業を受けてもらうのではなく、“楽しい授業づくり”に参加してもらい、普段高校生が受けている“授業”というものを新たな視点で考える場を用意する。この取り組みは 1994 年以来続けられているものであり、今年度で 13 回目となる。<sup>1</sup>

今年度行われたのは、「比較表現の比較・検討」の授業である。この授業の中心は、各々の比較表現の表す意味やそれらの違いを理解させ、状況・文脈に即してより適切な表現を用いることができるようにすることである。本論では亘理（2006）に依拠しながら、文法に浸透している語用論を実際のコミュニケーションに活かすための教育内容を構成し、自然な状況を設定する形で授業をつくる。

本論においては、「比較表現の比較・検討」の教育内容構成の具体案を提示する。また、授業プランおよび、授業プランによる授業実践（1日体験入学で実施されたもの）の過程の検討、そしてそれをふまえた授業プランの部分的な改訂を考察する。

## 1. 「比較表現の比較・検討」における教育内容構成

### 1.1. 目標の設定

本授業プランにおける教育内容は、比較表現の持つ意味・機能を正しく理解することによって、状況・文脈に即し、より適切な表現を用いることができるようにすることである。つまり比較表現の語用論的側面に注目する。

文部科学省検定の現行教科書では、比較表現の形態論的、統語論的な側面に重点を置いているが、各々の比較表現が使用される適切な状況・文脈についての説明がなされていない。つまり、そこで重視されている教育内容は、例えば“*-er* と *more* の選択”や“文の構造（比較級+*than*）”といった形式的なものがそのほとんどを占める。もちろん形態論的、統語論的側面は全体として教育内容を構成する際に不可欠である。しかし、それだけにとどまっていた語用論的側面まで教えられていないことは問題であり、本授業プランでは語用論的側面に教育内容の中心をおいた。

本授業プランで扱う比較表現は中学校で導入される、高校生にとって馴染みの深い表現である。しかしそれらの比較表現の扱いが、訳語の教授に終始してしまう傾向が強い。結果として、訳語だけでは明確にならない表現の意味・機能が理解されず、そのため、状況・文脈に即してそれらを使い分けるといった意識も生徒のなかに形成されない。そこで、本授業プランでは比較表現が用いられる状況・文脈の設定を行い、それらに即してより適切な比較表現を考えるとこの形式の問題を作成した。また、無味乾燥な例文の羅列を避け、ストーリー性のある高校生同士の会話文形式の英文を採用した。

以下に授業プランで扱う比較表現を挙げる。

- ・ “比較級 *than*”
- ・ “*not* 比較級 *than*”
- ・ “*as* 原級 *as*”
- ・ “*not as* 原級 *as*”
- ・ “*no* 比較級 *than*”
- ・ “*less* 形容詞 *than*”

比較表現の語用論的側面の理解を促すために、比較表現の表す意味を正しく理解することは重要である。本授業プランでは比較表現の表す意味を明確にするために図式を用いて視覚的に表現することを試みる。（1.2.2. 参照）

また、本授業プランの作成に際して、教育内容を明確にするために、取り扱う形容詞の種類に注意した。(1. 2. 3. 参照)

## 1. 2. 授業プランの特徴

本授業プランは、比較表現の持つ意味・機能の理解を通して、「状況・文脈に即した比較表現の使い分けができるようにする」ことを狙うことから、以下の特徴を有する。

### 1. 2. 1. 状況・文脈に即した比較表現の使い分け

これまでの英語の授業実践の中で、比較表現の語用論的側面を教育内容として含む具体的な授業プランは見受けられなかった。言語使用の諸側面に着目している「英語の比較表現の教育内容構成」(巨理 2006)に依拠して、主にミントン (2004) を検討し、授業プランを作成した。

比較表現が教科書や学習参考書において扱われるときには、その重点は形式的な側面に置かれる。また、表現の多くが、それ以上分析不可能なイディオムとして扱われている。ミントン (2004) は比較表現の語用論的側面を扱う数少ない文献のひとつである。

例えば“not 比較級 than”の表現に関してミントン (2004 : 52) は、「このパターンが可能なのは、誰かが言った(書いた)ことに反論する場合、または質問に答える場合だけ」と述べる。

A : I'm taller than you.

B : No, you're not taller than me.

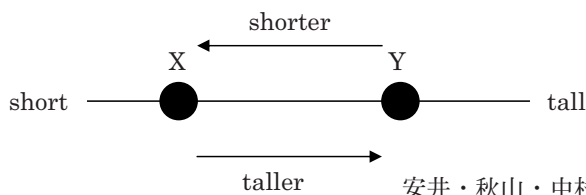
A : 僕は君より背が高い。

B : いや、君がぼくより背が高いなんてことはない。 ミントン (2004 : 52)

上記の例のように、教科書では扱われない使用場面への言及がなされている。こうした文献に基づいて、教育内容の構成を行った。

### 1. 2. 2. 直線を用いた図式の活用

一般に、比較というものは、程度・段階のいえる意味的次元において行われるものである。つまり、tall-short の組み合わせのように、1次元上の対の関係と見なすことができ、その次元(この場合は「背の高さ」)の上で、いかなる2点を取り上げても、それらの量の大小関係を比べることができるものである。逆に、open-closed のように、対立的に A か non-A かというように、尺度を成すとはみなしにくいものは比較の次元にはなりえない。上記の比較の特性を踏まえて、比較表現の表す意味が以下のように1本の直線を用いて視覚的に表示されてきた。



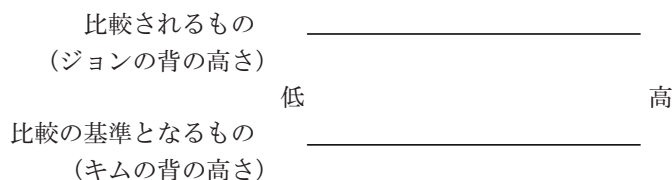
安井・秋山・中村 (1984 : 266) をもとに作成

比較表現の表す命題をその直線上に記述することによって、訳語だけでは明確にならない比較表現のもつ機能の理解を促す。しかし、本授業プランにおいて用いる図式は比較表現の表す意味をより忠実に表現するために下記の3つの特徴を有する。

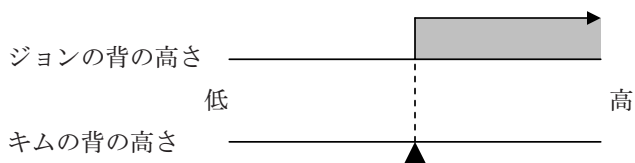
- I 比較されるものと比較の基準となるものの直線を分けて2本にする。
- II 比較されるものを領域で表し、点を固定しない。
- III 比較されるものと比較の基準となるものが尺度に関して、同程度を認める場合には●で印し、認めない場合には○で印す。

“John is taller than Kim.” 「ジョンはキムより背が高い。」という例文に即して考察する。

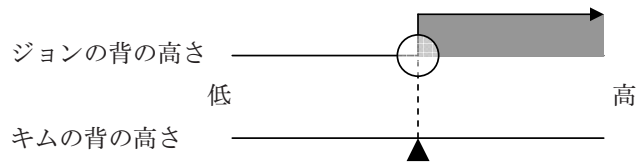
I. 比較級や原級を用いる比較表現は2つの項（ジョンの属性とキムの属性）を1つの次元（背の高さ）に関して比較するという機能を有する。つまりこの場合では、ジョンの背の高さとキムの背の高さを比較することになる。多くの比較表現は「会話者同士で知っていると思なされるものを基に、聞き手の知らないものを述べる」ために使用される。つまり比較されるもの（ジョンの背の高さ）について言及するために、比較の基準（キムの背の高さ）を引き合いに出すという形式である。そこで図式においても、「話者による新情報である比較されるもの」と「会話者同士の共通認識である比較の基準」を同一直線上に記述するのではなく、それぞれ別の直線を用意し、区別する。



II. 「ジョンはキムより背が高い。」という命題は、ジョンの背の高さについて具体的に述べているものではなく、漠然とキムより高いということしか述べられていない。したがって、引き合いに出されるキムの背の高さとは違い、ジョンの背の高さは直線上に具体的な点を固定せず、領域で示す。つまり、比較の基準となっているキムの背の高さからジョンの背の高さに垂直な線を延ばし、それより高い部分が、この発言から推測できるジョンの背の高さの存在しうる領域である。



III. 「より背が高い」という意味から、ジョンとキムの背の高さが同じということはないことがわかる。したがって、キムの背の高さから垂直に延ばした線と、ジョンの背の高さの直線の交わる部分に○をおく。



「同じ」を含むか含まないかの違いは、例えば“比較級 than”と“as 原級 as”の対比を考える際に重要な相違点となる。

### 1.2.3. 取り扱う形容詞の限定

比較表現に有効な形容詞の分類は、亘理（2005）によると以下の通りである。

- ・尺度形容詞 反意語のペアの一方の単語だけが、一般的な how 疑問文を認める。  
(例 How long is it? は一般的な「長さ」の問いであるが、How short is it? は it is short という前提の文脈以外では成立しない。)
- ・評価形容詞 反意語のペアの両方の単語が how 疑問文を認める。一方の単語は一般的な how 疑問文で用いられ、もう一方の単語は特殊な使い方の how 疑問文になる。  
(例 How good is it? は一般的だが、How bad is it? は話者が it is bad と思って用いる問い。)
- ・極値形容詞 反意語のペアの両方の単語が how 疑問文を認める。両方の単語とも特殊な使い方の how 疑問文になる。  
(例 How hot is it? も How cold is it? も話者が it is hot / cold と思って用いる問い。)

以上の例文は次のような言語事実によって動機付けられる。

- (a) This cake is bad, but it's better than that one.  
(このケーキは不味いが、あれよりはマシだ)
- (b) \*This cake is good, but it's worse than that one.  
(前後で矛盾が生じる)

亘理（2005）をもとに作成

評価形容詞は(b)ように用いることはできない。(a)の比較表現に用いられている形容詞 good は相対的な意味を持つ。それに対し、(b)の比較表現で用いられている形容詞 bad は話者が it is bad と思っているため、絶対的な意味を持ち、文全体での意味が通じなくなる。

- (c) \*It is hot, but it's colder than yesterday.  
(d) \*It is cold, but it's hotter than yesterday.

極値形容詞は、ペアになる形容詞のどちらも(c), (d)のように用いることはできない。(c), (d)の比較表現で用いられている形容詞 cold / hot は絶対的な意味を持ち、話者が it is cold / hot と思っていることになるため、文全体での意味が通じなくなる。

比較の指導においては、形容詞の分類に注意を向けることは重要である。本授業プランの目標は状況・文脈に即し、より適切な比較表現を用いることができるようになることである。それに必要な限りで、以下の四角で囲まれた形容詞に限定して問題作成にあたった。

	negative	positive
◇ 尺度形容詞	short	long
◇ 評価形容詞	bad	good
◇ 極値形容詞	cold	hot

### 1. 3. 授業プランにおける教育内容の論理構造

本授業プランでは、訳語や表す意味の似た表現を対比し、比較・検討する。比較表現には肯定文、否定文や形容詞の反意語 ((antonyms) クルーズ 1986 : 204) の組み合わせを変えることにより、対比させる表現によっては、訳語だけを見ると同じ意味を表しているように思えるものが多い。

具体的に扱う比較表現とその訳語の例は以下の通りである。(訳語は教科書、学習参考書、辞書などを基に作成。)

- ① Tom is taller than Kim. 「トムはキムより背が高い。」  
[ 比較級 than ]
- ② Kim is shorter than Tom. 「キムはトムより背が低い。」  
[ 比較級(反意語) than ]
- ③ Tom is as tall as Kim. 「トムはキムと同じくらい背が高い。」  
[ as 原級 as ]
- ④ Kim isn't taller than Tom. 「キムはトムより背が高くない。」  
[ not 比較級 than ]
- ⑤ Kim isn't as tall as Tom. 「キムはトムほど背が高くない。」  
[ not as 原級 as ]
- ⑥ Kim is no taller than Tom. 「キムはトムより少しも背が高くない。」  
[ no 比較級 than ]
- ⑦ Kim is less tall than Tom. 「キムはトムより背が高くない。」  
[ less 形容詞 than ]

比較表現の中に、使われる状況・文脈への考慮がなされず、さらにそれらが有する意味・機能の理解が曖昧なまま、訳語のみを手がかりに認識されているものが多い。また、教科書や学習参考書で与えられている訳語が必ずしも正しく表現の意味内容を表していない場合すらある。

以下ここでは授業プランの中で扱う対比を具体的に考察する。「比較されるもの」は話題の中心、「比較の基準となるもの」は会話者同士の共通の認識というように文脈によって決まる。問題を自然な会話の中に設定するため、扱う対比は「比較されるもの」と「比較の基準となるもの」が同じものに制限される。つまり①と②のような対比は考えない。



### 1.3.1. 形容詞の相対的用法と絶対的用法

状況・文脈に応じた比較表現の使い分けを考える際に、形容詞の絶対的用法・相対的用法の区別は無視できない。比較表現の中で用いられる相対的用法の形容詞は、限定や叙述でそのまま用いられる絶対的用法の場合とは異なり、尺度上の相対的な位置関係を表す。

◇ 絶対的用法： 1) Tom is tall.

1)' \*Tom is tall, but he isn't tall.

◇ 相対的用法： 2) Tom is taller than Kim.

2)' Tom is taller than Kim, but he isn't tall.

2)'の文では、指示対象の身長についてなんら絶対的断定をしておらず、相対的にトムとキムの身長について差があり、トムの方が背が高いということを明示する。

### 1.3.2. “比較級 than”の「差の明示」と“as 原級 as”の意味

教科書では“as 原級 as”の訳語として「同じくらい〜だ」と記述されており、“比較級 than”とは全く別の意味を表すように思える。

① Tom is taller than Kim. (>)

③ Tom is as tall as Kim. (=)

しかし Huddleston & Pullum (2002: 199) によると、“as 原級 as”は“AT LEAST equal”「少なくとも等しい」という意味を表す。つまり、等号不等号を用いて表すとすれば、(≥)になるのである。

また、文脈の中で“比較級 than”で表すことができる意味を、あえて“as 原級 as”を用いて表現することによって「差を強調する」前者とは対照的に、「差をぼかして」表すことができる。つまり“as 原級 as”は「丁寧さ」が求められる状況・文脈では、より適切な表現といえる。

### 1.3.3. “比較級 than”と“not as 原級 as”の使い分け

①と②はどちらも“比較級 than”の表現であり、比較されるもの・比較の基準となるものが反対になり、反意的形容詞を用いることによって同じ意味を表しているように思える。

① Tom is taller than Kim. (>)

② Kim is shorter than Tom. (<)

しかし、ミントン (2004: 70) はこれらの表現の組み合わせをイコールと考えることが危険であると述べる (この場合は男性を形容するときに tall という形容詞には一般に肯定的意味合いがあるのに対して、short にはやや否定的な意味合いがあるため)。ミントン (2004: 71) は「話題の中心が Kim であり、Tom を引き合いに出して Kim の身長について否定的な形容詞を使わずに言及したい」というようなときには、⑤のように“not as 原級 as”の表現を使えばよいとしている。

教科書においては“not as 原級 as”は「ほど〜ない」という訳語が記述されているに



とどまっている。しかし 1. 3. 2. で述べたように, “as 原級 as” の表す意味が ( $\geq$ ) 「少なくとも等しい」ということを確認しておくことで, その否定である “not as 原級 as” の表す意味が「より～ない」( $<$ ) になることが説明でき, ②と似た意味を表すことがわかる。

⑤ Kim is not as tall as Tom. ( $<$ )

また, short という否定的な意味の形容詞に関して Kim と Tom の背の高さの差を明示する “比較級 than” の ②に対して, ⑤はより丁寧な表現である。

### 1. 3. 4. “not 比較級 than” と “not as 原級 as” の使い分け

④と⑤はどちらも否定文であり, 表す意味も似ている。

④ Kim isn't taller than Tom.

⑤ Kim isn't as tall as Tom.

教科書には各表現の発言されうる場面についての記述はないが, この2つの表現は文脈の違いを考慮して使い分ける必要がある。

リーチ (1987: 144) によると, 否定文は「肯定文に比べると処理に時間がかかり, おそらくは処理の仕方でも困難であるかのうようである。それ故, 話し手が肯定文の代わりにわざわざ否定文を選ぶという場合には, 発話を必要以上に婉曲的, かつ難解にしているわけである。(中略) 話し手がそのようなことをするには, 何らかの理由があるはずである。ということになれば, 否定文を使用するもっとも明白な理由は, それに対応する肯定文を打ち消すということである」と述べている。「対応する肯定文を打ち消す」とは, 「誰かが言った(書いた)ことに反論する場合, または質問に答える場合」(ミントン 2004: 52) である。

反論する場合や質問に答える場合のときのみ使われる “not 比較級 than” とは違い, ミントン(2004: 71) は “not as 原級 as” を「A is -er than B のパターンに対する自然かつ標準的な否定文」と述べている。“not as 原級 as” は一般的に上記のような文脈による制限なく使うことができる。

### 1. 3. 5. “no 比較級 than” と “less 形容詞 than” の意味

発言される状況・文脈に特徴がある “no 比較級 than” と “less 形容詞 than” を扱う。

“no 比較級 than” の ‘no’ は much や far と同じく程度の副詞であり, ‘no’ は差がゼロであることを強調する。しかし “no 比較級 than” の表現は差がゼロであればいつでも使えるというわけではない。

⑥ Kim is no taller than Tom.

ミントン(2004: 57) によると⑥は背が低い Tom を引き合いに出して, Kim の背がいかに低いかを強調する文になる。

“less 形容詞 than” は「より～ない」という訳語であるが, ミントン(2004: 74) は「-er をつけて比較級をつくる短い形容詞をこのパターンに用いることは, 実はかなり珍しいケースなのです。(中略) しかし一方, more を使って比較級をつくる形容詞であれば, less をつけ

でも問題ありません」と述べる。つまり，“less 形容詞 than”は“not 比較級 than”や“not as 原級 as”と同じような命題を表すが、使用される文脈に限定がある。ミントン(2004:75)は「自然な英文と認められるのは、その形容詞がいったん使われたあと、意味を限定するために再び less をつけて用いるとき」と説明している。

⑦' Kim is tall, but Kim is less tall than Tom.

「キムは背が高いが、トムほどではない。」

以上の2つの比較表現を具体的な文脈のなかで、既習の“not 比較級 than”，“not as 原級 as”の表現とともに対比し、適切な表現かどうか考える。

## 2. 「比較表現の比較・検討」による授業実践と改訂

### 2.1. 「比較表現の比較・検討」の授業プラン

「比較表現」の比較・検討

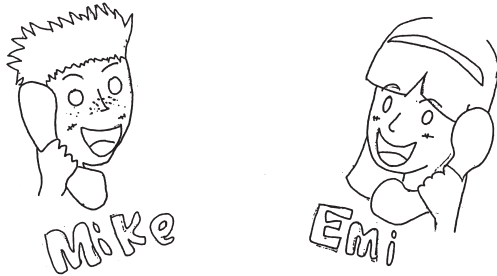
～高校生1日体験入学～

▶ きょういくほうほう

北海道大学教育学部教育方法学研究グループ  
2006/6/24

1

高校生一日体験入学 授業プラン



Mike は札幌に留学しているアメリカ人で、Emi のクラスメイトです。二人は夏休みに旅行を計画していますが、二人とも別々の追試を受けなければならないので、電話で日程や旅行先の相談を行っています。

【 問題 1 】

Emi : I'd like to travel abroad for our summer vacation.

Mike: Sounds nice, but I have to take three make-up exams. So my vacation will be short.

Emi : Um. How long will your vacation be?

Mike: I don't know exactly yet. How about you?

Emi : **My vacation is (ア) , too. But it is (イ) because I have to take one make-up.**

Mike: How about Okinawa? For Okinawa, we can travel there within three days or so. I have never been there.

空欄に入れても前後の会話と矛盾しないものは (ア) と (イ) それぞれ { short / shorter / long / longer }

のうち、どれだと思いますか。

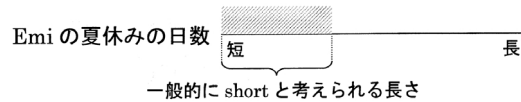
(ア) … ( ) (イ) … ( )

注) ・ make-up exam ; 追試

【解説】

答え… (ア) short (イ) longer

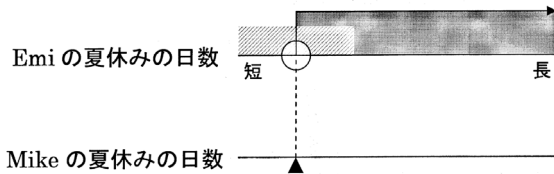
「Emiの夏休みはshortであるけど、longである。」は矛盾している表現ですが、では「Emiの夏休みはshortであるけど、longerである。」は矛盾した表現でしょうか。まず“My vacation is short.”の意味を確認しましょう。**Emiは自分の夏休みが一般的な高校生の夏休みにしては短いと考えているのです。**



ではなぜshortでありながらlongerと言えるのでしょうか。理解しやすくするために、問題文の省略を補ってみましょう。

it (my vacation) is longer **than your vacation.**

となります。つまりこの比較級longerの働きは、Emiの夏休みとMikeの夏休みとをlong(長さ)という尺度で比べた結果、Emiの夏休みの方が長かった、ということをお伝えしているだけなのです。



つまり、比較級はあるものとあるものを比べた結果、**その尺度 (longなら「長さ」) について「差」(図の塗りつぶし部分) が生じていることを明示するために使われるのです。**

【問題2】

Mike: How about Okinawa? For Okinawa, we can travel there within three days or so. I have never been there.

Emi: Well, I want to go to another place.

Mike: Where?

Emi: How about Seoul? (※2)

沖縄に行きたいと思っているMikeに対して、EmiがMikeと口論にならないように韓国のソウルを提案したいとき、(※2)ではどちらの表現を用いた方がいいと思いますか。

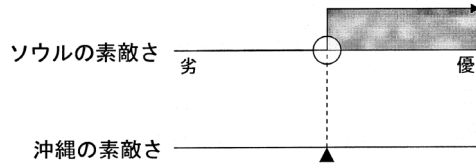
- 1) I think Seoul is nicer than Okinawa.
- 2) I think Seoul is as nice as Okinawa.

答え… ( )

理由

【解説】  
答え…2)

比較級を使って “I think Seoul is nicer than Okinawa.” ということはできますが、問題1で学習した比較級の働きを思い出してみましょう。この表現はソウルと沖縄には nice、いわば「素敵さ」という尺度に関して明確な差があり、「ソウルの方が素敵だ」ということを明示します。沖縄に行きたいと思っているマイクに対してこの発言をしてしまうと、口論の種になってしまう可能性が高いのです。(！)

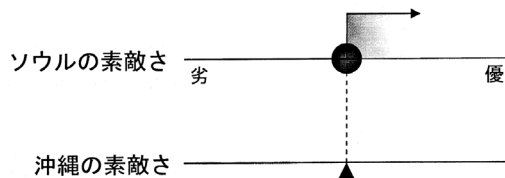


では2)のように as~as の形式を使うことによって Emi はソウルと沖縄は nice という尺度については「差」がない、つまり同じだということを主張したいのでしょうか。それならば、Mike は「沖縄でもいいじゃん。」と言い出してしまうかもしれません。

ではこの場合なぜ、

2) I think Seoul is as nice as Okinawa.

が適切なのでしょうか。as~as の形式はソウルと沖縄がまったく同等だと言っているのではなく、「ソウルを過小評価してはいけな、沖縄と同じかそれより素敵だ」と言っているのです。



6

【問題3】

Emi : I think Korea is as nice as Okinawa. I love Korean culture,  
and there are many places to see in Seoul.

Mike: Definitely. But (※3)

Mike は (※3) で次のうちどちらの表現を用いたと思いますか。

- 1) Korean food is more unappetizing to me than Okinawa's food.
- 2) Korean food is not as appetizing to me as Okinawa's food.

( ) の表現を用いたと思う

理由

注) ・ definitely ; たしかに

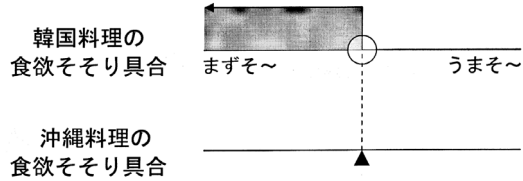
・ appetizing ; おいしそう

・ unappetizing ; おいしくなさそう

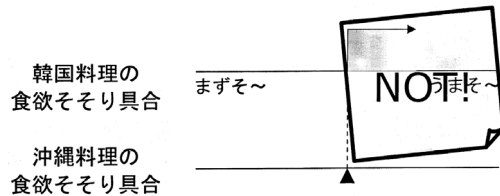
7

【 解説 】

1)は比較級を用いた文です。つまり、unappetizing「おいしくなさそう」という尺度に関して韓国料理と沖縄料理の「差」を明示しています。この直接的な表現は韓国文化を愛する Emi の機嫌をそこねてしまうかもしれません。



一方、2)は、as ~ as を not で否定することによって、「差」を明示する 1) に対し、「差」をほかすことができます。



【 問題 4 】

Mike: But Korean food is not as appetizing to me as Okinawa's food. Besides the tour of Seoul is more expensive than the one of Okinawa, isn't it?

Emi : No! (※4) **Both are much the same prices.**

Emi の(※4)の発言として、下線部分と矛盾しないものは次のうちどちらだと思いませんか。

- 1) **It is not as expensive as the one of Okinawa.**
- 2) **It is not more expensive than the one of Okinawa.**

( ) の文は矛盾がない。

理由

注)・ besides ; その上

【 解説 】

答え…2

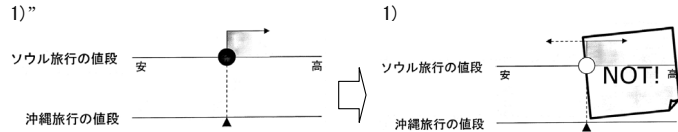
どちらも「沖縄より高くない」ということを表しますが、はっきりした発言されうる文脈・意味の違いがあります。2)のような not 比較級 than の形式の文が発言されうる文脈にも、注意すべき点があります。この形式は A is 比較級 than B の単純な否定文として英語を学習する私たちにとっては馴染みのある形式ですが、**実はこの形式はある決まった文脈でしか使えないのです。**

本文では、Mike の “Besides the tour of Seoul is more expensive than the one of Okinawa, isn't it?” という発言に対して not 比較級 than の形が使用されています。つまりこの形式が使えるのは、今回の文脈のように**誰かが言った(書いた・思った)ことに対する反論・あるいは質問に対する返答のとき**だけです。

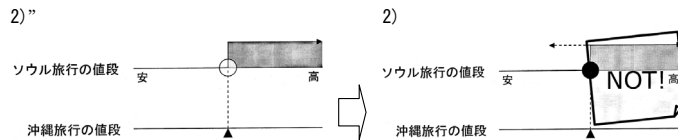
つまりこの文脈では一見どちらの表現も使うことができるように思われます。それでは Both are much the same price. と矛盾しないのはどちらでしょう。まず注意すべきことは、1)、2)はそれぞれ下記の 1)´, 2)´ に not を用いた否定文であるということです。

- 1)´ It is as expensive as the one of Okinawa.
- 2)´ It is more expensive than the one of Okinawa.

1)´→1)を图示します。



2)´→2)を图示します。



つまり、1)´)では Both are much the same price. と矛盾してしまうのです。

【 問題 5 】

Emi : And Seoul is not as far as you think. So we can spend much time to see sights and taste Korean food, such as kimchi, jijimi and so on. I think it will please you.

Mike: Gee, is kimchi Korean food?

Emi : Yes, it originally comes from Korea.

Mike: I thought it was a Japanese food. I like spicy foods and often eat it in Japan.

Emi : Really? **Japanese kimchi is spicy, but** (※5)

(※5)の Emi の発言として、下線部分と矛盾しないものは次のうちどれだと  
 思いますか。(複数可)

- 1) **it is not spicier than genuine Korean kimchi.**
- 2) **it is no spicier than genuine Korean kimchi.**
- 3) **it is not as spicy as genuine Korean kimchi.**
- 4) **it is less spicy than genuine Korean kimchi.**

( ) の文は矛盾しない。

注) ・ please ; ~を喜ばせる ・ genuine ; 本場の



【 解説 】

答え…3)と4)

1) について

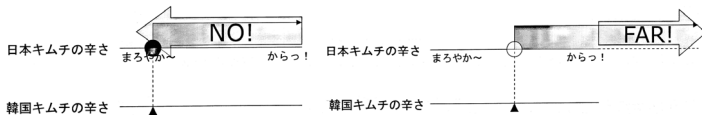
問題4で学習したように、not 比較級 thanの形式は反論や疑問に対する答えの場面でしか使われないので、ここでは不適切です。

2) について

no 比較級 than の「no」は much や far と同じ「差」を強調する程度の副詞と呼ばれるものです。つまりこの「no」が強調する「差」はゼロということです。では、「差」がゼロ、つまり「差」がないからといって、A as 原級 as B と同じ意味になると考えてもよいのでしょうか。

2) it is no spicier than genuine Korean one.

この英文は、辛くない本場韓国キムチを引き合いに出して、日本のキムチがいかに辛くないかを強調する文なのです。つまり下線部分と矛盾してしまいます。



3) について

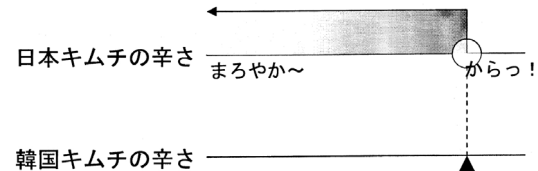
問題4で学習したように、「AはBより〜ない」といいたいときの自然かつ標準的な言い方はこの3)で、この場面では最もこの表現が適切と言えるでしょう。

4) について

less 形容詞 thanで「より〜ない」という意味を表しますが、「erをつけて比較級をつくる短い形容詞」をこのパターンに用いることは、実はかなり珍しいケースです。

less+「erをつけて比較級をつくる短い形容詞」の文が自然な英文と認められるのは、その形容詞がいったん使われたあと、意味を限定するために再び less をつけて用いるときです。

Japanese kimchi is spicy, but it is less spicy than genuine Korean one.

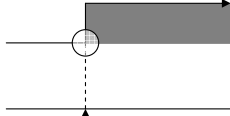


つまり、この文脈では4)は正解となります。

しかし、やはりこのように less 形容詞 thanの形式を使える場面においても、not as 原級 as の形式を使う方がごく自然です。

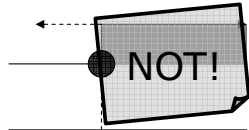
ま と め

① A 比較級 than B。



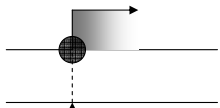
「差」を明示する。

① “ A not 比較級 than B



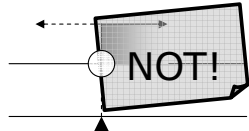
反論・疑問に対する答えでしか使わない。

② A as ~ as B



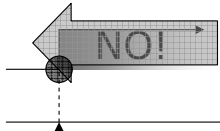
AはB以上である。

② “ A not as ~ as B



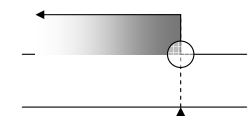
「AはBより～ない。」の標準的な英訳。

③ A no 比較級 than B



比較級で用いられている尺度に関して程度が低いBを引き合いに出して、Aがいかに程度が低いかを強調する。

④ A less 形容詞 than B



「AはBより～ない」という意味を表すが not as ~ as の形式の方が一般的によく使用される。

研究課題

比較に用いられる形容詞は尺度形容詞、評価形容詞、極地形容詞の3種類に分かれます。

・尺度形容詞 反意語のペアの内、一方だけが一般的な how 疑問文を認める。

[?] How young are you? How old are you?  
→実際の年齢はいくつであっても OK

\*他には…\*heavy:light, fast:slow, deep:shallow, wide:narrow, thick:thin など

・評価形容詞 ペアの両方の単語が how 疑問文を認めるが、一方は一般的な how 疑問文で用いられ、もう一方の単語は特殊な使い方の how 疑問文になる。

[特] How bad is it? How good is it?  
→話者は it が指すものを bad だと認識 →実際に良くても悪くても OK



\*他には…\*pretty:plain, kind:cruel, polite:rude, clean:dirty, safe:dangerous など

・極地形容詞 反意語のペアの両方の単語が how 疑問文を認めるが、両方も特殊な使い方の how 疑問文になる。

[特] How cold is it? How hot is it?  
→話者は it が指すものを cold だと認識 →話者は it が指すものを hot だと認識



\*他には…\*sweet:sour, happy:sad, proud of:ashamed of など

今回の授業プランで用いた形容詞は、下記の四角で囲った尺度形容詞と、評価形容詞・極地形容詞の「プラスの意味」の形容詞のみです。

	negative	positive
尺度形容詞	short	long
評価形容詞	bad	good
極地形容詞	cold	hot

私たちが比較表現の指導過程を考える際に形容詞の意味特性を考慮し、それを3種類に分類しなければならなかった理由は、タイプによって形容詞の性質が違い、比較級になったときもその性質が受け継がれるからです。次の問題を考えてみましょう。

例1) 尺度形容詞ペア



ア) Emi's hair is longer than Mike's. イ) Mike's hair is shorter than Emi's.

ア)とイ)は、Mikeの髪の毛の長さを引き合いに出してEmiの髪の毛の長さについて述べているのか、Emiの髪の毛の長さを引き合いにMikeの髪の毛の長さについて述べているのかという意味では全く異なる文ですが、表している事柄としては同じこと(絵の状況)を述べています。

では、他のタイプの形容詞の場合はどうでしょうか。14ページの説明を参考に、次の例2と例3の文が表す意味をそれぞれ図示してみましょう。例1のように同じ事柄を伝える文になっているでしょうか。

例2) 評価形容詞ペア

ウ) Seoul is better than Okinawa. エ) Okinawa is worse than Seoul.

ソウルの素敵さ \_\_\_\_\_ 沖縄の素敵さ \_\_\_\_\_  
劣 優 劣 優

沖縄の素敵さ \_\_\_\_\_ ソウルの素敵さ \_\_\_\_\_

例3) 極値形容詞ペア

オ) It is hotter in Okinawa than in Seoul. カ) It is colder in Seoul than in Okinawa.

沖縄の気温 \_\_\_\_\_ ソウルの気温 \_\_\_\_\_  
さみー あちー さみー あちー

ソウルの気温 \_\_\_\_\_ 沖縄の気温 \_\_\_\_\_

16

## 2. 2. 授業実践記録

以下ここでは授業の概要を述べる。問題5は授業の中では扱わなかった。

### 授業形式

道内から集まった高校生(1年生4名, 2年生7名, 3年生5名)を, 1グループ4人として4グループに分ける予定であったが, 欠席の高校生, 当日申し込みの他大学の学生(1名)がいたため, 3人と5人のグループができた。学生1人が教師として授業を行い, 教師が出した問題について, 各グループで議論を行ったうえで解答を発表するという形式で授業を行った。その際, 各グループに学生を1人ずつティーチングアシスタントとして配置した。授業時間は60分である。

初対面の高校生をグループイングしたため, 各班とも議論に乏しくなることが予想されたが, ティーチングアシスタントによる発言のサポートもあって, 授業開始後ほとんどして高校生からも声があがり, 予想以上に議論が盛り上がり上がっていた。

### 問題1

1つの文章内の2つの解答欄に, 一見相反する2つの単語(shortとlonger)を入れる問題であった。比較の内容が理解できれば, 2つの文が矛盾しないことがわかるようになっていく。「前後の会話と矛盾しないように」という条件で作成した。

解答に関して, ティングアシスタントの報告によれば, “too”という単語が手がかかりになった高校生が多かった。また文脈を的確に理解して, 和訳を考えた上で空欄に当てはまる単語を考える班もあった。正解を難なく導き出していったが, 解答に要した時間は各班でまちまちであり, 時間

が余って授業の内容以外のことを話す班も見られた。

また、今回の模擬授業では、「比較表現が表す意味を図式で表示して考える」という方略を学習してもらうという大きな狙いもあった。しかし、提示した図式を全員が容易に理解したとは言えない状況であった。具体的には、「比較対象と同程度であること」を認める場合は対応する点に●を、認めなければ○を貼るといったことや、比較されるものが存在しうる領域を斜線で塗るといったこと（1. 2. 2. 参照）が、理解の困難な箇所であったようだ。高校1年生には、数学における不等式の解を数直線によって表現するといった経験がなかった可能性があり、理解を困難なものにしたのかもしれない。

## 問題 2

「口論にならないように」という条件のもとで、“比較級 than”よりも“as 原級 as”を用いた表現の方がより適切であることを、理由とともに問う問題であった。

各班とも正解を導いていたうえ、理由も「Okinawa を否定的に捉えている 1) よりも、2) の“as 原級 as”の方が穏やかに言える」といったものや、「1) では不適切だということで消去法により 2) を選ぶ」といったもので、我々の狙い通りに考えを進めてくれたようだった。ただ中には、「口論にならないためには、はっきりと言ってやったほうがいい」とか、「マイクとエミの仲の良さだけで、答えは変わってくる」といったように、実生活や場面設定にまで踏み込んだ意見もあった。生徒が自発的に、表現を使用する際の場面について考慮する姿勢が見られ始めた。

高校生は“as 原級 as”の意味を「同じくらい～だ」と捉えていることが予想できたので、「同じだったらどっちを選んでもいいことになるから、マイクは、やっぱり沖縄に行くことを主張してしまうのではないか」という意見が高校生から自発的に出てくれることを期待した。しかしそのような意見は出てこなかったため、2つの班でティーチングアシスタントが上記のような問いかけをした。その結果、高校生がそのことに気づくという場面も見られた。“as 原級 as”が表す正確な意味は、「…を過小評価してはいけない、同じかそれよりも～だ」というものだが、それを知っていた高校生はいなかった。この点に関しては、解説で理解してもらった。

問題 1 で比較表現が表す意味を図式で表現するといったことを導入したことにより、“as 原級 as”の図式に関しては、ある程度の理解がなされていたのではないだろうか。また、以後の問題で、図式を自発的に活用して問題を解こうとしてくれた高校生もいた。

## 問題 3

問題文に問題 2 のような「口論にならないように」という言葉を入れずに、“比較級 than”と“as 原級 as”のどちらの表現がより適切かを理由とともに問う問題であった。また、未完成の図式を完成させるという問題にも挑戦してもらった。

どちらの表現がより適切かを選ぶ問題に関しては、ほとんど迷わず“as 原級 as”の表現を選んだ生徒が多く見られた。問題 2 からの流れで、自然と失礼にあたらぬ表現を考えて選んでいたようであった。

図式に関しては、これまでの比較表現とは異なり、文中に‘not’が含まれている否定文であったため、●を○に変えるといったことや、矢印の向きを変えるといった問題は難しいようだった。“as 原級 as”の図式の理解が曖昧なまま、“not as 原級 as”の図式を完成させる問題に入ってしまったため、難易度の上昇につながった。問題 2 と問題 3 の間に“as 原級 as”の肯定文を取り上げて図式で表すという練習問題が必要であった。

#### 問題 4

文章中に下線部を設け、下線部と矛盾しない表現を選んでもらうという問題である。“not 比較級 than”と“not as 原級 as”の文脈による使い分けを学習するという狙いがあった。しかし、問題を解くための切り口が、各表現の意味に着目し、「下線部分と矛盾のないような表現を選ぶ」というものであり、教えたことと問題にしていることが違った。

また、最初のうちはこれまでの問題の流れを受けて失礼にあたらないような表現はどちらかという意識で問題を解こうとしていた生徒が多くいた。しかし、アシスタントのアドバイスもあって、最終的には正解を選ぶことが出来ていた。解答の導き出しかたは生徒によって様々で、問題3のように自ら図式を活用して導いていた生徒や、bothがあるにもかかわらず“not as 原級 as”を使うのはおかしいという判断で選ぶ生徒もいた。

2.3. では、問題4の改訂を試みる。

#### 感想アンケートの内容

授業の後にアンケートを無記名で書いてもらった。アンケートの結果は以下の通りである。

##### 1. 性別

男：3人 女：13人

##### 2. 学年

1年生：4人 2年生：7人 3年生：5人 他大学学生：1人

##### 3. 授業は楽しかったですか？

はい：16人 いいえ：0人

項目欄への書き込み（一部抜粋）

- ・みんなのいろんな意見が聞けて、とても楽しかった。
- ・グループ内で意見を言い合うのは、初め少し緊張しましたが、徐々に慣れて楽しかった。
- ・普段学校で行っている授業とは全然違い、班の人と意見交換したりしながら問題に取り組むことが出来て良かった。

##### 4. 授業は理解できましたか？

はい：15人 いいえ：0人 （どちらとも言えない：1人）

項目欄への書き込み（一部抜粋）

- ・みんなで話し合っ、わかりやすい説明が聞けたので、理解できた。
- ・ホワイトボードでの説明がわかりやすかった。
- ・図での説明だったので、理解しやすかった。
- ・もっと強く言いたい所、アピールしたい所を強調したほうが良いと思う。
- ・途中、表がよく分からなかったが、最終的に理解できた。
- ・もともと英語が苦手だったので少し難しかった。

##### 5. 比較表現に対する意識が変わりましたか？

はい：16人 いいえ：0人

項目欄への書き込み（一部抜粋）

- ・直線を使って良かった。
- ・学校では簡単に説明するだけだが、奥深いことがわかったので、次からは気をつけて使いたい。

- ・比較表現はもっと単純なことだと思っていたけど、かなり複雑だと思った。

6. 今後も比較表現を勉強したいと思いますか？

はい：14人　いいえ：2人

項目欄への書き込み（任意抜粋）

- ・中学校・高校で習ったことより奥が深いので興味をもてた。
- ・英語の勉強は嫌いだ。
- ・自分で勉強するのが難しそう。
- ・出来るなら。自分が納得するまでやりたい。
- ・考えるのが楽しくなったから、やりたい。

7. この授業を受けて良かったと思いますか？

はい：16人　いいえ：0人

項目欄への書き込み（一部抜粋）

- ・ゼミの雰囲気を感じることが出来て良かった。
- ・なかなか受けられないような授業だったので良かった。
- ・色々な人の意見が聞けて良かった。

8. 自由記述

- ・短い文でもいろんな意見がでてきて、さまざまな視点から考えることができ、楽しかった。
- ・英語は好きなのだが、これからももっと英語を勉強して、もっと英語を好きになろうと思えた。
- ・英語が苦手なので、今回英語の授業が出来て良かった。
- ・学校では、同意表現を教えてもらってニュアンスを理解していて、なかなかこういう考え方を中心にしたことがなかったので良かった。
- ・英語の授業なのに図を使ったことがびっくりした。でもとてもわかりやすかった。
- ・もう少し時間があれば良かったと思う。

### 2.3. 「比較表現の比較・検討」の改訂

授業実践記録から本授業プランの改訂すべき点について考察する。まず問題1では、高校生の多くははじめて見る図式について戸惑っている様子であった。特に、今回の図式の必須要素である、●と○の意味、差の領域を斜線で示すことについては、説明により時間をかけ、生徒に図式の内容を理解させ、実際に図式を使用し解かせる練習問題が求められる。問題自体は平易であるので、図式をしっかりと理解できれば、後の問題の説明もさらにスムーズにいくだろう。

次に問題2については、“as 原級 as”の図式が理解できるようになるかがポイントとなる。実践では多くの生徒が説明に納得していたが、後述する問題3で“not as 原級 as”が問われると混乱する高校生が多かったことから、“as 原級 as”の図式を定着させる練習問題を、必要に応じて設定すべきである。

問題3では、解説の中で生徒に図式の未完成な部分を補ってもらう質問をした。問題3は平易であったが、この“not as 原級 as”の図式を完成させる作業は、高校生には難しかったようである。その理由として、“as 原級 as”の図式を実際に使用する機会を与えず、●が○に変わることを問題にしたことが考えられる。すでに述べたように、問題3の前に“as

原級 as”の図式理解の問題が必要であろう。

次に、問題4では、本来“not 比較級 than”という形式は、誰かが前述したことに対し反論する際に用いられるという根拠から正解2を導き出すはずであったが、結果的に‘Both are just the same price.’と矛盾無く使用できるものとして正解とするという説明に終わっている。そのため本問のねらいであった「not 比較級 than が持つ反論という働き」の理解が生徒たちの間で不十分だったと考えられる。

そこで新たな問4では、ある文脈の中で“not as 原級 as”，“not 比較級 than”の両形式を登場させ、2つの対比の中でそれらが持つ働き（ここではばかりの作用と反論）を考えられるような構成にする。また文脈を決定する際には、2人のやりとりの中で一方が他方の発言に反論するという状況が自然に生まれてくるような場面設定を心がけた。

問い方に関しては①、②にそれぞれどちらの表現を用いるかを理由とともに答えさせる形式をとる。解答には、①、②が発言される文脈を対比することが求められるため、従来問4に比べ、解答を導く過程で両者の使い分けについて生徒自身に深く考えさせることができると考える。

以下に具体的な問題4と解説の改訂版を載せる。

<p><b>【 問題4 】</b></p> <p>Mike: But Korean food is not as appetizing to me as Okinawa's food. Besides, I don't have much money now.</p> <p>Emi : I guess ( ① ).</p> <p>Mike: Are they?</p> <p>I heard some Okinawa tours are now on sale. They only cost 39,800 yen. Seoul tours are more expensive, aren't they?</p> <p>Emi : No! ( ② ). I saw some are just the same price.</p> <p>( ① )( ② )でEmi は次のどちらの表現を用いたと思いますか。</p> <p><b>A) Seoul tours ( They ) are not as expensive as Okinawa tours.</b> <b>B) Seoul tours ( They ) are not more expensive than Okinawa tours.</b></p> <p>( ① ) では (            ) を用いたと思う ( ② ) では (            ) を用いたと思う</p> <p>理由</p> <div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div>
---



【解説】 ① 答え … A      ② 答え … B

A, B どちらも「ソウルは沖縄より高くない」ということを表しますが、用いられる文脈にははっきりとした違いがあります。

①の発言は、I guess という表現があることから見ても Emi の「ソウルは沖縄ほど高くないだろう」という推測と考えられ、Emi が2つの値段の「差」を明確に捉えていたかどうかは明らかではありません。仮に Emi がその「差」を知った上で①を発言したとしても、ここでは、ソウルツアーが高いと考える Mike に「ソウルが沖縄と比較しても高くない」ことを伝えるのが目的で、その「差」を強調する必要はありません。よって①では、直接的な表現を避け「差」をぼかす働きを持つ not as ~ as が適切です。

これに対し、②においては Mike によって「沖縄ツアーの中には 39,800 円のものもある」という具体的な比較基準が提示されたため、ソウルと沖縄の値段の「差」は明確に捉えられます。そして注目すべきは、Emi が Mike の “Seoul tours are more expensive, aren't they?” という発言に反論しているという状況です。②で not more ~ than を使う理由はまさにここにあります。今回の文脈のように、**誰かが言った（書いた・思った）ことに対する反論・あるいは質問に対する返答の時に使われるのが not more ~ than です**。反論という意図が無い限り、not more ~ than は使われません。

#### 注

1 1994 年以降行われた授業実践の題名は、以下のものである。

94 年：「ゼネコンで遊ぼう」、95 年：「沖縄戦を考える」、96 年：「創氏改名」、97 年：「公共事業」、98 年：「日本に移り住んだ外国人」、99 年：「小数とは何か」、00 年：「進行形入門」、01 年：「生類憐みの令」、02 年：「抑制を考える」、03 年：「n 進法」、04 年：「英語の態の指導」、05 年：「アルゴリズムとは何か」

#### 参考文献

- ・安井 稔・秋山 怜・中村 捷 (1976) 『形容詞』[現代の英文法 第7巻] 研究社
- ・G. N. リーチ著, 池上 嘉彦・河上 誓作訳 (1987) 『語用論』紀伊国屋書店
- ・T. D. ミントン著, 水嶋いづみ訳 (2004) 『ここがおかしい日本人の英文法Ⅲ』研究社
- ・亙理陽一 (2005) 「英語の比較の指導における形容詞の扱いについて」『教授学の探究』[No. 22] 北海道大学大学院教育学研究科教育方法学研究室, pp. 143-150
- ・——— (2006 a) 「英語の比較表現の教育内容構成」『教授学の探究』[No. 23] 北海道大学大学院教育学研究科教育方法学研究室, pp. 79-98
- ・——— (2006 b) 「英語の比較表現の教育内容構成：「有標性」概念と言語使用の諸側面に着目して」『北海道教育学会第50回研究発表大会：自由研究Ⅲ資料』, pp. 1-19
- ・Celce-Murcia, Marianne & Larsen-Freeman, Diane, (1999<sup>2</sup>). *The Grammar Book An ESL/EFL Teacher's Course*. Boston, MA: Heinle&Heinle.
- ・D. A. Cruse (1986). *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (2005). *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.